

# 集 東日本大震災津波 特 あの日から7年

山田町社会福祉協議会

# 復興からその先へ

## 復興期の地域の「コミュニティを再生するために

東日本大震災から7年を迎えました。被災地ではハード事業の復興で新たな街並みが見え始めている一方で、住民は応急仮設住宅で構築したコミュニティを離れ、災害公営住宅など被災者の居住環境の移行に伴い、地域コミュニティは変化を生じています。

被災地の各社協では行政、福祉関係者、住民らとともに、地域に見合ったコミュニティの在り方を模索しながら、被災者が自らの力で歩み始めるための自治会組織の支援などに取組んでいます。

東日本大震災で甚大な被害を受けた山田町社会福祉協議会（箱石紅子会長）では、復興期の地域コミュニティの再生に向けて、さま

ざまな支援に取り組んでいます。

黒澤寛事務局次長兼地域福祉課長、伊藤美子地域福祉課生活支援相談員係主任らから、現在、山田町社協が一丸となって取組む「コミュニティ支援」「自治会立ち上げ支援」「日常生活相談」「民生委員との協働」などについて伺いました。

## コミュニティ支援 顔の見える

### 住民同士の関係づくり

災害公営住宅の入居や高台造成地への住宅再建等がスピードを増す一方で、未だ応急仮設住宅での生活を余儀なくされている住民は約2,000人とされます。



復興が進む山田町



災害公営住宅

山田町社協では町中心地区や織笠地区など5地区の実状に合わせ、社協事業の統合や改廃を経て、現在、さまざまな事業を確実に進めています。

コミュニティ支援については、震災以降、外部のNPO法人など多くの支援団体が住民支援やサロン活動を展開しましたが、時間とともに支援は減少し、ここ数年は支援団体の役割や活動内容などを十分に把握できないままの状態でした。

現在はそうした反省を踏まえ、地域に根付く新たなコミュニティ支援の仕組みをつくり始めています。一例としては年3回、山田町社協が「やまだん」を開催。町内で活動する団体や事業内容を把握し、連携を図っています。

山田町はもとも社会資源が少なく、NPO団体も震災前は1団体のみで、このため震災後、コミュニティ形成とともに支援団体のための事業開発や次代を担うリーダー育成の必要に迫られました。しかし、調査を進めると町全域の既存ボランティア団体数や趣味活動団体数は意外に多く、現在は多くの方々の協力を得て、新事業を開発しながらコミュニティ支援に取り組んでいます。

現在、そうした方々のお力をお借りしたコミュニティ支援は、町内全域対象の▽「カフェよりあいつこ」（応急仮設、災害公営住宅向けサロン）▽「在宅カフェよりあいつこ」（小地域向け）▽お楽しみバス運行事業（高齢者のひきこもり予防）▽料理アカデミー（仮設住宅の男性対象、月1回）▽女性料理アカデミー（女性リーダー育成、月6回）▽花だより訪問事業（仮設、みなし仮設、災害公営住宅の訪問、年4回）など、さまざまな事業を実施し、町民のコミュニティ意識を高めています。

山田町社協独自としては、災害ボランティアアセンダー運営訓練を実施しています。

## 自治会立ち上げ支援

地域力と福祉力を高めるために

人が被災者を守る  
らの力で歩み始めるために

# 生活支援相談員29 被災者の方々が自



町社協職員



生活支援相談員 29 名が支援

自治会活動への参加をいかに促すかは、災害公営住宅に共通する課題のひとつとされます。

自治会立ち上げについては、山田町社協は被災地の中では「後発」とされますが、これまで二か所の災害公営住宅で各十数回、団地住民で構成される自治会設立準備委員会（支援者・山田町、岩手大学三陸復興・地域創生推進機構、山田町社協、岩手県建築住宅センター、岩手県社協）を支援してきました。昨年12月には山田町中央団地で第一回定期総会が開催され、自治会の立ち上げに至りました。

災害公営住宅入居者は高齢者世帯及び一人暮らし世帯の方も多く、またコミュニティ活動に対する経験が浅い人が多いため、課題や思いを共有し、自治会立ち上げを支援しています。

なお、入居者間の交流と孤立防止やコミュニティ形成を目的に、山田町社協と岩手県建築住宅セン

ター間で協定書を締結し、お互いの役割を確認しています。社協の役割としては集会における進行役や記録整理役として、住民が主体となる支援を基本としていますが、これからも継続的に山田町社協の関わり方を変えながら、自治会活動を支えていくことが必要です。

## 民生委員との協働

民生委員と

生活支援相談員の協働

山田町社協では生活支援相談員の担当地区を地区民協の地区割にあわせ、生活支援相談員と民生委員の両者がお互いに情報共有し、協働して住民支援を進めています。

山田町社協の生活支援相談員（29名）は、毎月開催される地区民協定例会に出席し、情報交換を行っているほか、民生委員主催のサロンにも出席。住民支援の円滑化に努めています。

しかし、民生委員の不在地区や委員の受け持ち世帯が多いなどの理由から、なかなか協働した支援体制の構築は難しい状況にありますが、山田町社協では住民支援に向けて更に力を入れる構えです。



黒澤 寛 事務局次長  
兼 地域福祉課長



伊藤 美子 主任  
地域福祉課生活支援相談員係主任



定期的に行われている町社協ボランティアセンター運営訓練

## 「日常生活相談」から「自らの力で歩み始めるための支援」

# 笑顔が広がる地域福祉活動拠点「ひなたぼっこ」

### 集う場づくり

応急仮設住宅から災害公営住宅への移行期に入り、コミュニティ形成の新たな局面を迎えています。

山田町社協では地域支援が一層重要になったことから、昨年5月から町中心部に地域住民の集う場づくりとして、地域福祉活動拠点「ひなたぼっこ」をスタートさせました。

ここは住民の相談場所のほか、「地域の皆さんの交流機会の場」「地域を担う子ども達が集える場」「地域を活性化する担い手育成の場」となることを願って開設したものです。「ひなたぼっこ」は月曜日から金曜日(午前10時～午後4時)



「ひなたぼっこ」を利用する町民の方々

## 町民の皆さんを笑顔にする町社協に

に開館しています。

2階には中学・高校生及び専門学校受験を控える生徒たちのために、「明日を担う生徒のための自習室」(事業主体はNPOこども福祉研究所、森田明美理事長)が開設され、この建物は「ゾンタハウス」と呼ばれています。

この日、「ひなたぼっこ部活day」を訪れた一人暮らし世帯の中村ワキさんは、昨年12月に応急仮設住宅から町最大の災害公営住宅「山田中央団地」(146戸・高齢化率約65%)に入居したばかり。「まだ新しい環境に馴染めず手探りの毎日で、日々努力しています。気軽に交流できる場があつて本当によかった。また来たいです」と笑顔で話しています。

山田町社協の横田佐知子生活支



山田町ゾンタハウス(1階右が「ひなたぼっこ」、左が「ZOO(ズー)カフェ」)



「ZOO カフェ」に集う町民の方々



山田高等学校のボランティア生徒

援相談員は「人が集まれる場をつくり喜ばれています。一緒に楽しみながら地域のコミュニティをつくり、地域力を高め、支え合うまちをつくっていききたい」と声を弾ませていきます。

### 交流と笑顔の場を提供

「ひなたぼっこ」に隣接して「ZOO(ズー)カフェ」(愛称は高校生カフェZOO)が開設され、県立山田高等学校の女子生徒数人がボランティアとして活動しています。

入れたての焙煎コーヒーは一杯110円。メニューはすべて格安の値段です。

上沢リエさん(3年生)は「ボランティアの中には被災した友達もいますが、まちが元気になるよう頑張っています」と笑顔で話し、全員が大学などに進学予定です。カフェでは住環境の変化から交流機会を失った方々に交流と笑顔の場を提供しています。

## 住民の コミュニティ意識を 高めるために



山田町社会福祉協議会 沼崎 弘明 常務理事

町のハード面は進展していますが、被災した住民の方々は応急仮設住宅で構築したコミュニティを離れ、新たな生活の場での共同体づくりに直面しています。ソフト面の再構築は時間を要します。町社協のコミュニティ支援は時間との勝負とと思っています。

生活するうえで基盤はできたとはいえ、被災した方々の孤立と不安をなくし、住民同士のつながりをつくっていくには、多くの方々と力を合わせ、そして自分たちの力で住みよいまちをつくっていくという住民意識が大切となります。町社協は震災前より良い支援の仕組みをつくらなければなりません。